

<実践報告>

教員養成段階における「自問清掃」指導の意義と成果

平田 治 木曾郡大桑村立大桑小学校
土井 進 信州大学教育学部教育科学講座

Developing Students' Character through School Cleaning Activities with Their Own Soul-Searching at a Teacher Training Program

HIRATA Osamu: Ookuwa Elementary School, Ookuwa Village
DOI Susumu: Educational Science, Faculty of Education, Shinshu University

研究の目的	「自問清掃」指導を中心とする学校掃除教育についての講義後に書かれた学生達の感想文を分析し、検討を加え、教員養成段階における「自問清掃」指導の意義と成果を明らかにする。
キーワード	自問清掃 自発性 自律性 教員養成 学校掃除
実践の目的	長年にわたって「自問清掃」を指導し、多大な教育成果をあげてきた平田が、その成果を教員養成段階にある学生に講義することによって、学生にどのような変容がもたらされるかを究明する。
実践者名	第一著者と同じ
対象者	信州大学教育学部「生活科指導法基礎D」受講学生（40名）
実践期間	2007年11月15日～2007年12月6日
実践研究の方法と経過	土井は平成4年7月の読売新聞紙上で竹内隆夫に出会い、平成4・5年度の「教育実践研究の基礎」の授業に竹内を招き、それぞれ4回にわたって「自問清掃」の講義を受けた。この講義を受講した学生たちによって、平成6年度から「信大YOU遊サタデー」が実施され15年目を迎えている。平成19年3月に三重大学の齋藤昭名誉教授から、平田が「自問清掃」の実践を通して多大な教育成果を上げていることを紹介された。これを受けて両者が講義の構想を練り、「自問清掃」を「生活科指導法基礎D」の授業において、平田が3回にわたって講義することになった。
実践から得られた知見・提言	受講した学生達は、「自問清掃」の教育的価値や内発的動機付けの重要性について理解を深めることができ、教員養成における「自問清掃」指導の意義が確認された。さらに、こうした講義による学びが、具体的な体験を通して学ぶ場とリンクすることの必要性が再認識された。

1. はじめに

筆者は2007年11月から12月にかけて、信州大学教育学部の「生活科指導法基礎D」の授業の一環として「自問清掃」⁽¹⁾を中心とする学校掃除教育について、3回にわたって講義した。本稿はその実践報告である。講義後に書かれた学生達の感想文に分析検討を加えながら紹介し、教員養成段階における「自問清掃」指導の意義と成果について考察する。

「自問清掃」は学校掃除教育方法の一つではあるが、掃除指導だけに留まることのない教育方法である。清掃活動を通して子どもから自発性を引き出すことによって、教科学習はもちろん生活全般における自主的自律的な態度形成を目指す。内発的動機付けが重視され、徹底して「信じて待つ」ことが核心とされる。

ところが、学校掃除に関する学術的研究は少ない(2)、学校掃除に関して教員養成学部の講義で重点的にとりあげられたという報告は見当たらない。日本教師教育学会「教師教育研究文献目録」の中にも、それを見つけることはできない。インターネットによって様々な検索をかけても、論文・著書共に探し当てることはできない。しかし、土井は教員養成段階において「自問清掃」を実践することが重要であることに着目して、平成10年12月18日より月・水・金の午前8時～8時50分までの時間帯に学生有志に「自問清掃」を指導するとともに、自らも実践している。平成20年8月までに1,070回の実践を積み重ね大きな教育効果をあげてきている。

本稿では、まずは講義の概略を示し、次に受講した学生の感想文を分析検討しながら紹介する。さらに教員養成段階にある学生に対して、「自問清掃」について指導することの意義と成果に関しても考察を加えることとする。

2. 「自問清掃」の概要

「自問清掃」について、その概要を示しておくことにする。但し、「自問清掃」の詳細やその具体的な実践方法について述べるのが本稿の主旨ではないから、詳しくは他に譲る。

(註1を参照のこと)「自問清掃」は、長野県の竹内隆夫(元高社中学校長)によって創案された掃除教育プランで、五つのステップとして構想されている。掃除から一切の管理・強制を排除して自発性を引き出し、自主性、自律性、思いやりの心を育てるための道筋が構造化されている。したがってこのプランでは、単に掃除ができるようになるだけではなく、「自問」とわざわざ冠されているように、掃除をとおして自らの生き方を問う姿勢が醸成されることを目指す。道徳教育方法論のひとつと捉えることができるであろう⁽³⁾。

第一段階は『がまん清掃』と呼ばれ、がまんとやる気という意志力を目標にする段階である。友だちに話しかけられないで黙って掃除することに挑戦する。がまん強い意志力を鍛えると同時に、人との関係におけるがまん強さも学ぶ。このため、しゃべりなくなったり遊びなくなったりした時は、掃除の邪魔にならない場所で休み、掃除ができるようになったら戻ることとする。働くか休むかを子ども自身に決めさせ、徹底して「信じて待つ」。このため、指示・命令・注意を一切しない。掃除における無言を、我慢強さを育てるための一種の条件設定というイメージで子どもに説明して内発的に動機づけることによって、結果

として無言で掃除ができるように仕向ける。無言そのものを強要しないという点が、所謂無言清掃と大きく異なっている。

第二段階は『しんせつ清掃』と呼ばれ、黙っていてもどれほど人の心を汲む気働きができるかを目標にする段階である。ここでは、「言葉でなく行為で協力する」ことを目指す。そのために、言葉で連絡をとることをやめてみる。そういう条件設定で掃除をする。一見不自然ではあるが、口枷を敢えて自分自身に嵌めてみる。目配せや手招きなどによる連絡も止める。わざと不便な状況に、身を置いてみるようにする。

第三段階は『みつけ清掃』と呼ばれ、最後の一分一秒まで仕事を見つけとおすことに挑戦する段階である。一応掃除が終わり一見きれいになったと思われるような状態から、さらに「見つけよう見つけよう」と努力するため、前頭葉が刺激され創造力が豊かになることを期待する。汚いところをきれいにする掃除という考え方から、花をとってきて花瓶に飾ったりポスターを描いたりするような行為も奨励する。

第四段階は『感謝清掃』と呼ばれ、感謝の気持ちで働けるかどうかを自問する段階である。「感謝」をキーワードに、自分が取り組んでいる清掃の意味や価値について自問する。掃除にとりかかる前に、人や物に対する感謝の気持ちがあるか否か、自分に問いかけて確かめておいてから掃除にかかる。感謝の気持ちが不確かなときは、働かずに休む。

第五段階は『正直清掃』と呼ばれ、掃除時間の一切の行動を、自分自身の心の尺度で判断し、正直な気持ちで過ごす時間とする段階である。ほめられるために、叱られないために、人と比べて優越感を持ちたいために働くのではない。そういう自分かどうかを自問してから、掃除にとりかかる。判断力を問うと同時に、福祉や奉仕の精神を身につける段階でもある。

3. 講義の実際

実施した3回の講義の概要を以下に示す。

3.1 講義第1回 実施日：2007年11月15日

講義冒頭、学校掃除に関する自分のイメージを自由に記述させた。以下、第1時のテーマは、世界的な視点から見た学校掃除の実施状況と従来型掃除教育の問題点。

(1) 学校掃除の世界的現状 (以下①②③は、沖原前掲書(1978)による) ①「世界の学校掃除地図」の提示 ②三つの型(清掃員型・清掃員生徒型・生徒型)の提示と背景にある価値観や理由 ③「生徒型学校掃除」実施率は34%という現実の確認 ④日本人の伝統的掃除観・シュリハンドクの話・神道儒教道教の影響の指摘

(2) 学校掃除は学校の独自教育活動であることの確認(平田前掲書(2005)に詳しい) ①「学校保健法」における規定の確認 ②東京都における業者委託によるトイレ掃除の現状 ③札幌地方裁判所「掃除当番取り消し請求事件」の概略と判決内容の紹介

(3) 従来型掃除教育方法の提示と検討 ①9つのタイプと要素の提示 ②従来型掃除教育方法の背景にある意識と価値観

(4) 第10番目の掃除指導方法「自問清掃」 ①成果としての生徒作文の例示 ②「自問清

掃」独自の指導方法：「指示・命令・注意をしない」、「ほめない・叱らない・比べない」、
「仕事を休んでもよい」、「振り返りノートを記す」。

(5) 次時の予告 感想を書かせる

3.2 講義第2回 実施日：2007年11月29日

第2時のテーマは、「自問清掃」の概略と生徒作文の紹介による教育的成果の確認。

(1) 前回講義の感想文から2例を紹介

(2) 「自問清掃」の紹介 ①脳科学 前頭葉にある人間らしさを司る三つの働き（「三つの玉」） ②小4作文の紹介と学生の感想（1例） ③「年齢による脳の発達」のグラフ提示と概説 ④5段階の掃除教育プラン「自問清掃」の紹介（掃除風景を写真でも提示）

(3) 「自問清掃」独自の指導方法の再確認

(4) 学力差や能力差を越えた人間関係が育つ「自問清掃」（子どもの作文を例示）

(5) 講義の感想を書かせる

3.3 講義第3回 実施日：2007年12月6日

第3時のテーマは、現代掃除ブームの動向と「自問清掃」を核とする教育のあるべき姿。

(1) 前回講義の感想文の紹介と補足事項

(2) 現代掃除ブーム事情 「掃除に関する書籍の売れ行きランキング」の提示 ①分類作業（検討形態は、個人→グループ→全体発表） ②4分類できることの確認

(3) 変容してきた日本人の掃除観 ①人間の内面的な成長に目を向けた企業家のトイレ掃除（岡村勝正 『ツキを呼ぶ「トイレ掃除」』マキノ出版、2007年） ②なぎら健壺氏が指摘するおばあさんの玄関先掃除（中日新聞、2003年7月6日） ③学校現場における掃除指導マニュアルの要請（TOSS 岡山サークルMAK 『子ども自らが進んで動く掃除システム事典』明治図書 2007年 の紹介）

(4) 自分ならこうする掃除指導 第11番目の方法を考える

(5) 「わかる」から「できる」へ ①「机上」と「床上」とをむすぶ ②体験や活動を知識へとむすぶ ③保育での遊び→生活科での体験→総合学習での探求

(6) 感想を書かせる（3回の講義を終えて）

4. 受講後の感想

講義第1時の冒頭、自分が今持っている学校掃除に対するイメージを自由に書かせることから始めた。そして、各講義の終末時には、必ず感想文を書かせるようにした。したがって、連続して受講した学生は、都合4回感想を書いたことになる。以下、これらの感想文に拠って、受講した学生の学校掃除に関するイメージや理解がどのように変容していったかを紹介する。採りあげるのは、紙面の都合上、3回連続して講義に参加した学生中から8名である。受講者は、3回連続が26名、2回が8名、1回のみが6名であった。

まずは、講義第1時冒頭における学生達の学校掃除に対するイメージを列記する。以下に示すNo.〇〇は、筆者が便宜上付けた学生番号である。（以下、学生No.〇〇と記述）

学生No.1 先生が厳しかったので話しながらやっているとはよく叱られた。 学生No.2 め

んどくさい。 学生 No. 3 無言清掃 適当 皆やりたがらない。 学生 No. 4 無言清掃。 学生 No. 5 無言清掃 気づき掃除 音楽。 学生 No. 6 あまりやりたくない めんどくさい 友達どうしのおしゃべりの時間 無言清掃。 学生 No. 7 静かにやる 手ぬぐいをまいてするてきばきやる。 学生 No. 8 職員室をなぜ生徒がするのか 無言掃除 静の時間。 学生 No. 9 役割分担が決まっている 無言清掃。 学生 No. 10 ほうきに人気がある 帽子をかぶる 教室掃除は机運びが面倒。 学生 No. 11 めんどくさい やらされている事。 学生 No. 12 自分の使ったところを責任もってきれいにする。 学生 No. 13 面倒だけどやらなければならない みんなやらないから。 学生 No. 14 無言清掃 手ぬぐい そうきんがけ。 学生 No. 15 しっかりやらないと先生に叱られる ぞうきんは膝をついてやるように言われた 掃除が嫌いではなかったけれど好きではなかった。 学生 No. 16 ビートルズの歌 ほうきが好きだった ぞうきんがけ 卒業前の大掃除。 学生 No. 17 無言清掃 しゃべったら駄目。 学生 No. 18 無言 厳しい 班ごとで分担。 学生 No. 19 やらされました。 学生 No. 20 グループ清掃 分担 無言清掃。 学生 No. 21 無言清掃 役割分担。 学生 No. 22 「無言」を意識しすぎて騒いでやっていた。 学生 No. 23 便所掃除が臭かった。 学生 No. 24 雑巾がけが辛い。 学生 No. 25 静かにやらなければいけない(無言清掃) めんどくさい 強制的。 学生 No. 26 学年がバラバラで楽しかった(縦割り清掃)。 学生 No. 27 楽しかった。

学生達のイメージには、ある偏りが見られた。

ひとつは、学校掃除に対して「楽しかった」と好ましいイメージを持っている者は、学生 No. 26 と学生 No. 27 のみだということである。この2名以外は、「めんどくさい」と記している者が4名見られる他、「叱られた」「やらされた」「皆やりたがらない」等と記している者も多く、学校掃除に対して必ずしも好いイメージを持っていないことが推測される。また、無言清掃を体験した学生が多いことも目立つ。「無言」あるいは「無言清掃」という言葉を使用している者が、14名見られる。因みに、受講回数が2回以下の学生の中にも、無言清掃体験者が散見した。そして、「無言清掃」体験者が、掃除に対して好くないイメージを持っている場合が多かった。

学校掃除に対してこのようなイメージを抱いていた学生達が、3回の講義を通してどのような変容を示したのかについて検討する。まず講義第1時の最終段階でどのように変容したか。次に、講義第2時を経て、講義第3時後にどのように変容したかを見ることにする。

以下とり上げるのは、筆者が代表的なものとした感想である。いくつかの観点に即して、記述から変容が見えやすいものを選択した。観点としては、学校掃除に関するイメージが転換されたか、学校掃除教育の重要性を認識し教師の指導観について問い直しているか、「自問清掃」が目指す教育観に触れ自己を問い直し新たな視点から教職を捉えようとしているか、などである。

4.1 掃除教育に関するイメージが転換された例

(1) 好ましいイメージを持っていた学生

①学生 No. 27 は、第 1 時冒頭で「学校掃除に対するイメージ」を「楽しかった」を記している。この講義後、自分は他県出身者であり、「長野では無言清掃しているという話を聞き、とても驚きました」「私の体験した清掃は、楽しい時間でした。(中略)でも、今回先生の話聞いて、楽しいと誇っていた自分にも気づきました。目的がズレていたのだと思います」と記している。「目的がズレていたのだと思います」というのは、講義第 1 時で示された従来型学校掃除に対する自己評価であろう。それまで、単に「楽しかった」としかイメージしていなかった学校掃除に対して、自分の体験した掃除の目的はいったいなんだったのかという疑問を抱いたに違いない。

②学生 No. 26 は、講義第 1 時後「学校の掃除はやるものだと思っていて、深く考えたことはなかった」と記している。「自分がやってきた掃除に上のような名前を付けられるとなんだか自分がやってきたものは間違っていたような気がします。将来教師になったとき、私は私のやってきたように、再び何も考えずに同じ掃除を繰り返して指導することになってきたかもしれない」「きちんとその指導方法を学ぶべきなんだと実感した」とも記している。

(2) 好ましいイメージを持っていなかった学生

好ましいイメージを持っていなかった学生達も、3 回の講義を通して学校掃除の教育的な意義について理解を深めているが、ここでは次の 3 例を挙げることにする。

まず学生 No. 7 は、その後の感想文を読むと無言清掃の体験者だとわかる。第 1 時後には、「自分は無言で清掃をみんながやっているもんだと最近まで思っていた」と記している。また、第 2 時後には、次のように記している。「私は長野県出身なので常に無言清掃を言われ続けてきました。少しでも友達とおしゃべりしていると先生に怒られたりしました。(中略)なんで清掃場所から帰ってくるときも無言でいなければいけないのかなぞでした。」さらに、第 3 時後には「清掃についてこうやってとりあげて勉強や話をしたことや聞いたこともなく、初めて知ったことばかりだった。あまり清掃を重要なものと考えていなかった自分にとって清掃で子どもたちがそんなに変わるのかと疑問も思った。しかし、先生の話や友達の意見など聞いて、清掃のやり方一つで子どもたちの心に変化を与えられることに驚いた」と記している。

学生 No. 24 は、第 3 時後に次のように記している。「私が学級担任になったら、という仮定の話であるが、子どもの自発性を引き出したいために、見つけ清掃を実践したいと思った。そのために分担を決めないで見つけ清掃をやりたいと思った。しかし、教室・廊下・階段・トイレ等の大まかな分担を決めた方が、子どもにとって掃除がはじめてやすいかと考え、しかしはじめてやすさよりも自発性を引き出すためにはまったく何も決めないほうが適切なのか、と現在考えが揺れています。」

学生 No. 7 にしても学生 No. 24 にしても、自分の体験してきた掃除について新たな視点から見つめなおし、「私が学級担任になったら」というような積極的な姿勢で掃除教育を捉え始めていることがわかる。

(3) 「無言清掃」を体験していた学生

受講者の半数以上が「無言清掃」の体験者であった。その多くは、学校掃除に対して好ましくないイメージを抱いていた。「無言」で掃除することを強制された結果だと思われるが、これらの学生が「無言清掃」と「自問清掃」の本質的な違いに気づくことができたかどうか問題である。

学生 No. 18 は第 3 時後に、次のように書いている。「今まで掃除について、時間をかけて考えたことはありませんでした。掃除といえば、道具分担・役割分担・場所分担がされ、さらに無言でというイメージしかありませんでした。騒いでいたり掃除をしていないと叱られるから強制的にやらされていたように思います。この講義では、掃除は何のためにするものなのか考えさせられました。(中略) 子どもたちに自問清掃を取り入れさせる前に、私自身の自問が必要な気がします。この講義で聞いたお話をふまえて考えていきたいと思っています。」

学生 No. 21 は、第 3 時後に次のように書いている。「大学へ入ってからというより、高校の頃からほとんど掃除というものは縁がないような生活だったので、こんなにも掃除について考えてみたのはおそらく初めてのことでした。」「汚れていないのに分担だからやるというより、ここの汚れが目につくから掃除しようという清掃の時間をつくりたいと思います。すべては内面から光る人間になるために。」

学生 No. 18 学生 No. 21 共に、学校掃除のもつ教育的な意味を気づき、単に無言で掃除することを強制するのではなく、内面的な成長を図るにはどうすればよいのか考え始めている。

学生 No. 22 は、教育実習中に自問清掃を体験していた。「それまでに、無言清掃という清掃方法は、私自身経験したことがあり、自問清掃というものも、それとまったく同じであると思っていました。しかし実際に経験してみると、その中身は大きく異なり、とても衝撃を受けました。この経験と、今回の先生の講義を受けて自問清掃のよさは、とても伝わってきました。」第 2 時で「自問清掃」の説明をする際、「自問清掃」における無言(「がまん清掃」)は何分黙ってできるか挑戦するという条件設定であり、無言そのものを目標やきまりにして押し付ける無言清掃とは根本的に異なることを扱った。学生 No. 22 は、その内容をよく理解し感想として書いているのである。

以上、いずれの学生の場合も、講義第 1 時冒頭での学校掃除に対するイメージは転換されたといえよう。自分の体験やイメージに対して疑問を抱いて問い直し、従来型指導方法とは異なる新たな教育方法である「自問清掃」の発想と指導方法を知り、第 3 時講義後には学校掃除に対する理解を深め、その指導法を自分なりに真剣に考えなくてはならないのだという姿勢へと転換している様子が見て取れる。

4.2 教師の指導観について問い直している例

この講義をとおして学校掃除に関する理解が深まっただけではなく、教職課程に学ぶ者として、教師の指導とはなにかを問いかえす姿勢が生み出されている場合が見られた。

学生 No. 12 は、「この3回の講義で、掃除に対する見方がだいぶ変わりました。私は、学校でそうじすることは当たり前のものであり、その意味や意義を考えたこともありませんでした。今回、この講義がなければ自分が教師になっても、そうじについて考えることもなく、一方的に子どもにやらせるだけのそうじになってしまっていたでしょう。」

学生 No. 25 は、第3時後の感想では次のように述べ、自分の指導観について見つめて直している。「今日を含めて3時間掃除について講義して頂き、掃除に対するイメージが大きく変わった。最後に先生が掃除をしない子の気持ちがわかりますか？と言われたときハッとしました。私自身掃除はキライだったけれど、だからしないという選択は出来なかった。掃除をするといいというような宗教じみた考えのもと半ば義務的に行っていた。もし掃除をしていない子を見つけていたら、私は掃除をしなさいと怒ることしか出来ないと思う。どうして？ということを知られたら、それは、掃除はいいことだからとしか答えられない。何がいいの？なんて聞かれた時には、あたふたしてしまうだろう。いかに自分が今まで何も考えずに、何も悩まずに言われたとおりにしていればいいという考え方で掃除をしていたのだろうということを改めて反省した。掃除したくなかったらしくなくてもいいよ、と言えるほど余裕を持てるのは掃除に本当の意味をしっかりと理解しているという前提があるからだ。指導以前に私自身を変えていかなければならない考え方を、もう一度見直すいいきっかけになった。」

4.3 自己の体験と結んで教職について問い直している例

学生 No. 3 学生 No. 20 は、いずれも「無言清掃」体験者の学生である。彼等は、自らが体験した無言清掃や教育実習や家庭教師アルバイトでのエピソードなどにつなげながら、「自問清掃」について理解を深めているだけでなく、自己理解も深めているといえる。

学生 No. 3 は、第2時後に「自問清掃は子どもが段階を追って取り組み、最初に達成したことを次に生かしていけるし、子どもが無理なく目標設定が出来るという点で、画期的な方法だと思いました」と述べ、「自問清掃」に関する理解の深さを示している。また、第3時後の感想にも、そうした理解の深さが見られる。「児童・生徒が勉強するにしても、掃除するにしても、彼ら自身がそれをしたいという気持ち（内発的動機付け）にならなければ自発性は生まれないという点で、あらゆる場面で内発的動機付けはあてはまると思った。教育実習先では、講義の導入場面で、どのように事象提示したら生徒たちがその事象について知りたいと思うか、とても悩みました。掃除も同様で、いくら先生が掃除をしたら気持ちよくなる、などと話してもあまり意味がなく、掃除をすることの意味を生徒自身が気づかなければだめなのだと思います。また、先生が話した事が生徒に伝わらなくても、生徒同士であったら、同じ年齢同じ立場として、伝わるものがあると思う。自問清掃は個人だけでなく、相互の関わり合いが大切であると思いました。」このように学生 No. 3 は、内発的動機付けについて自己の体験とつなげている点、「相互の関わり合いが大切である」ことを理解している点で、「自問清掃」の要点をよく理解していると言える。

学生 No. 20 は、第1時後の感想では教育臨床演習での掃除体験について、第2時後の感

想では小中学校時代の掃除体験について触れている。そして、第3時後の感想では、家庭教師体験とつなげて次のように述べている。「私が家庭教師で教えている子ども、どんなに一生懸命問題と向き合っても解けない悔しさにぶつかっているのだと思います。先生のお話は、今までの自分の子どもとの付き合い方を考え直させてくれました。先生になりたいと思っているのに、自分の目線で子どもと接しているようではまだまだ未熟だなあと気づかされました。掃除も同じです。なんでこの子は掃除をしてくれないの？ではだめだということを感じました。」

5. 「自問清掃」指導の意義と成果

紙面の都合上すべての感想文を扱うことはできないが、例示した学生達に代表されるように、本講義を受講した学生達は、学校掃除教育のもつ教育的意味や価値について認識を深めるきっかけを得たように思う。掃除はただやらせたりやらされたりするものだというイメージ・レベルから、重要な教育的活動へと構成しなおす可能性があることを認識できたのではないだろうか。また、掃除という枠組みを超えて、教師を目指す自分の生き方を問いかえす学生も見受けられたことは、日々実践の現場に立つ筆者にとってはなによりも喜ばしい反応であった。

大学における教員養成課程において、学校掃除教育について学ぶ機会はほとんどないと言っても過言ではないだろう。学習指導要領に掃除教育が位置付けられていない以上当然のことではあろう。しかし、義務教育の現場に身を置く筆者からすれば、日本中のほとんどすべての小中学校で毎日日常的に実施されている学校掃除について、その指導方法や指導観に関する学習の機会がないことは残念でならない。なぜなら、通常の学校生活指導において掃除教育あるいは掃除指導は欠かせないものだからである。掃除は、学級経営の重要な柱と言っても過言ではないだろう⁽⁴⁾。しかしながら、昨今の教育事情の中で、ともすれば見過ごされがちな学校掃除について行き詰まり悩んでいる現場教師は多い。大学での教員養成課程を終え、採用されてすぐ4月から学級担任となった新卒教師達が、担任する学級で掃除指導に悩んでいる例は少なくない。学校掃除指導の発想や方法について学ぶ機会がなかった教師達は、結局は小中学校時代の自分の体験だけに基ついた指導に陥ってしまっている。したがって、大学における教員養成段階で、学校掃除教育に関して学ぶ意義はここにある。学校掃除教育は、極めて現場性の高い学習内容なのである。

ところで、学校掃除教育プランである「自問清掃」の目指すところは、子どもの自発性を引き出し自主性自律性思いやりの心を育てようとするものである。そうした主旨に基づいて、「指示・命令・注意をしない」「ほめない・叱らない・比べない」という独自の理念や指導方法を採用し、「何分黙って出来るか試してみる」「掃除を休んでもよい」などの条件を設定し、学校掃除の場を使役・労働の場から学習の場へと仕立て直したものが「自問清掃」である。「自問清掃」の目標は、一所懸命掃除する子どもを育てることではない。学校掃除を自問活動の場として自発性を引き出し、子どもの自主性自律性思いやりの心を育てようとする人間教育の方法論である。そこでは、内発的動機付けが最も重視され、徹底

して「信じて待つ」ことが求められる。教師は、「信じて待つ」という基本姿勢を徹底することによって、自らの教育方法や教育観を問い直さざるをえなくなる。そうした教師の自己変革への姿勢は教師自身の自問的な姿勢の形成であり、教師のこうした態度形成と相関しながら、子どもの自主性自律性思いやりの心が、掃除の場を超えて教科学習や生活全般へと波及していくようになるのである。

したがって教員養成において「自問清掃」について学習することは、学校掃除教育に関する理解を深めるに留まらず、学びにおける内発的動機付けの重要性や学習姿勢の基盤となる道徳性育成の重要性についての認識を深め、また教師を目指す学生が自身の生き方や学びについて問い直す機会ともなることが期待される。

受講した学生達の感想文を読む限りにおいて、学校掃除について学ぶ意味がわからなかったというような反応は一件も見受けられなかった。これは、筆者が現職の小学校教員であり、自ら実践する「自問清掃」を中心に講義したことと無縁ではないだろう。学生 No. 5 は、第3時後に次のように書いている。「3週にわたった先生の講義で、非常に多くのことを学ばせていただきました。(中略) マニュアル通りのやり方や、ゲーム感覚でのそうじではそれ(人との触れ合いや思いやりの心)は得ることが難しいのではないかと思います。掃除するという純粋な目的を持った上で、自主的に自発的に行動していくことができた時に、得ることができるのではないかと思います。」

こうした反応を示した学生達の中から、自問活動を重視する真に教育的な実践者がひとりでも多く育ってくれることを期待してやまない。

註

- 1) 「自問清掃」の全体像や詳細については、主に次の著書を掲げておく。
竹内隆夫, 1991, 『自問活動のすすめ・自らの生き方を問う子どもたち』第一法規
同 上, 1991, 『実践の中で自らを高める自問教育の手引き』日本教育新聞社
平田 治, 2005, 『子どもが輝く「魔法の掃除」・「自問清掃」のヒミツ』三五館
同 上, 2007, 『「魔法の掃除」13ヵ月・Iメッセージを語る教師』三五館
- 2) 沖原 豊, 1997, 『新・心の教育』学陽書房
, 2006年同 上, 1978, 『学校掃除 その人間形成的役割』学事出版
- 3) 齋藤 昭, 1996, 「「自問」と「対話」の教育 民主教育確立のために」三重大学教育学部研究紀要第47巻, pp.149-171
古川忠司・鎌倉正之・川根一仁・土井進, 2000, 「松川中学校における「自問清掃」の導入と展開(1)」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, pp.163-172
同 上, 2001, 「松川中学校における「自問清掃」の導入と展開(2)」信州大学教育学部附属教育実践総合センター紀要, pp.143-152
- 4) 学級経営における掃除指導の重要性について指摘する現場教師は多い。学級組織論に関する発言や著書の多い野中信用氏も、〈給食指導〉と〈清掃〉について指摘している。
野中信用, 2006, 『学級経営力を高める3・7・30の法則』学事出版, p.72

(2008年5月9日 受付)